

テーマ1：地理学×教育

災害の記憶と記録を探しだし継承する防災教育

パネリスト：広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 後藤秀昭（左）

ディスカッサント：東広島市教育委員会指導課 指導主事 清田 美紀（右）



★後藤（人間社会科学研究科准教授）

御紹介いただきました広島大学の後藤です。テーマ1のパネリストを担当いたします。どうぞよろしくお願いします。

私から、最初に防災教育について基礎的な話題提供をした後、東広島市教育委員会の清田先生に、学校教育の実態についてお話をいただきます。それらを踏まえて、参加者の皆様と課題や問題を共有し、あるべき方向とか効果的なやり方とか、そんなことをお話ししていきたいと思っています。活発な御議論、御発言、よろしくお願いします。

一般に災害伝承というのは難しいと言われます。だから、今日はこういうテーマが設定されているということだと思います。なぜ難しいかということについて簡単に言うと、災害は繰り返すのだけでも、そのサイクルが非常に長いということによります。各地で起こりますけれども、同じ場所では何百年に1回とか1000年に1回のタイムスケールになって、世代をまたぐということになってしまいます。したがって、災害の伝承には活動が必要です。それを防災教育と称しているわけですね。人間の経験だけで対応することが難しい。だからこそ、こういう活動が必要だと言えます。

活動する際に、資料とか教材といったものは何がいいのでしょうか。いろんなものが挙げられるかなと思います。また、場所はどこがいいのでしょうか。大体、身近な地域が挙げられますけども、そこが果たしてベストでしょうか。また、どの年齢に、どんな時間でやるといいのでしょうか。試行錯誤を積み重ね、また実践を共有しながら、効果的な方法を模索する段階ではないかなと思って、今日は、こういうテーマを設定しています。

ただ、注意しないといけないのは、防災には正解がないということだと思います。思考の参考となるものはたくさんあると思うんですけども、大人も子供も、型にはまらずに、状況に応じて対応していくという柔軟な思考が必要であろうと思います。防災教育というのは、教育の本質というか、本来的な役割を思い返す、そんな教育内容だなと感じているところです。

早速ですけども、死者、行方不明者数を時系列で見ると、戦後間もない頃は結構多くの風水害での死者がありました。一方で、70年を超えますとかなり減ってきます。突発的な津波、地震などを除くと、100名以下前後の年が多くなるわけです。したがって、災害を経験していない世代が多くなって、余計に防災教育が重要であると言われるようになってきたのではないかと思います。一方で風水害の災害死者は毎年欠かさずにありますので、これを重点的に、広島県内の様子も踏まえて、広島大学として、センターとして取り組んでいるというところです。

さらに、気候の環境も変化しています。1日に200ミリを超すというふうな強雨になる日が年々増加し、平成30年7月豪雨とか、あるいは今年の夏の長雨とか、まさに気候環境の変化を実感させるに十分だったような気がします。防災教育がますます必要になってき、その役割が小さくなるということは恐らくないだろうと思います。

平成30年7月豪雨の降雨の記録を見てみると、まさに記録的な豪雨で、たくさんの地点で記録が塗り替えられました。こういう記録的な豪雨というのは、地球の温暖化が背景にあると言われており、今年のノーベル賞受賞にも決まっている、大気循環のシミュレーションでの結果でも裏打ちされつつあるということです。ますます災害が多くなるということが予想されます。

この地図は2018年の豪雨で生じた斜面崩壊の様子を地図化したものです。源頭部の崩壊した数を数えてみると8,000を超えていまして、膨大な数の崩壊がありました。その点の位置というのは豪雨のあった場所と非常によく対応しますので、豪雨が引き金であったということは間違いありません。したがって、豪雨が災害の要因であるという情報だけでは防災教育になりません。それだけではないということが教育につながっていくのだろうと思います。

災害の素因である地形の様子というのも理解していく必要があると思います。豪雨というのは災害の誘因であるというふうに区分して考えることができるかと思っています。

海水を取り除いた日本列島を御覧いただいておりますが、巨大な山地に見えます。青い海のプレートが大陸のプレートの下に沈み込んでいて、日本列島はその背後の大きな塊になっています。海底から見上げてみると7,000メートル級の大山地で、ヒマラヤ級なわけですね。我々はその山の中腹に住んでいるということになりまして、国土の75%が山に占められているということを考えても、島国なんですけども、山国というふうに認識したほうがいいのではないかなと思います。

日本列島は非常に激しく隆起をしていますが、浸食の作用も世界に冠たるものです。したがって、日本の山の形は非常に凸凹が激しい、急峻な山になっています。山のピークや峰がはっきりしていて、深いV字状の谷が形成されます。これは南アルプスですけども、そのような特徴がよく見えているかと思います。

広島県の様子というのはちょっと違いまして、少し高い山に登ると、山の頂がきれいにそろっているというのが見えます。地形の輪廻という考え方がありますが、そのうちでは初期的な段階の山だと言われます。平坦面が隆起をして、それを川が深く削っているという段階です。とはいえ、広島県は平野が非常に乏しいところで、山地が広く分布していて、日本列島の典型的な場所であろうとも言えます。

土砂災害は、豪雨があることだけでなく、地形の特性、すなわち、急な斜面があるということが原因ですが、もう一つ重要な要素があります。これがハザードへの暴露（注）、人間の暮らし方のほうの問題です。すなわち、斜面崩壊という自然現象が土砂災害という自然災害になるということです。

広島県では平坦面が残る山地が多いと申し上げましたが、その周りは急な斜面となっています。その麓には斜面から崩れ落ちた堆積物で埋められていて、扇状地と呼ばれる地形ができています。山地斜面に住むのは難しいですので、扇状地のような緩い斜面に人々が住宅地を開発してきた。広島市はその典型的な場所であると言えようかと思います。

2014年にも土砂災害があり、そのあたりの地形の特徴を2つの地図で見いただいております。急な山地と低地が見えており、その間に緩やかな勾配を持つ扇状地が広がっています。

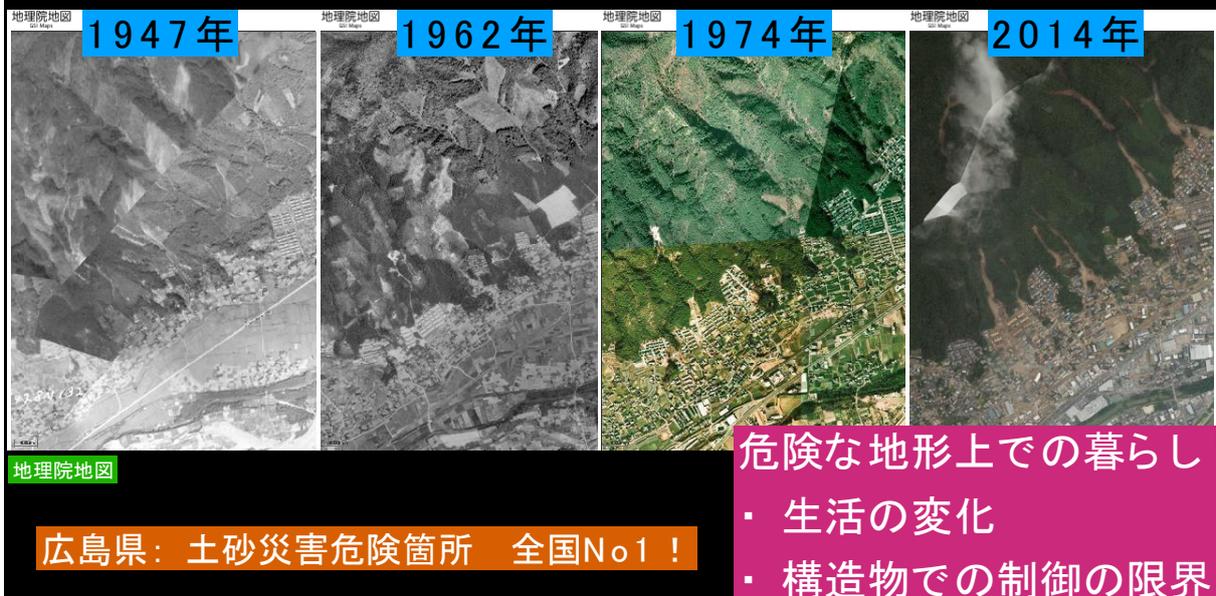
2014年の広島土砂災害



発表資料（後藤） P15

14年の土石流の様子を赤で示しています。山地から流れ出た土砂が扇状地に移動してきています。これは、すなわち、これまで繰り返されてきた作用が14年に再び起こったということで、自然現象としては同じ長いサイクルの中の、ほんの1つの出来事であったにすぎません。

2014年の広島土砂災害



発表資料（後藤） P16

一方で、土地利用は大きく自然の状態とは異なりまして、その様子は写真で見ることができます。戦後間もない頃の様子というのは一番左ですけれども、扇状地の場所は里山として利用されています。

した。ですが、高度経済成長期に入ってから現在に至るまで、延々と住宅開発が進められてきた。広島都市圏に組み入れられて、都市の住民として生活している人たちがたくさんいるのです。そして、その生活の場所というのは災害の素因に近づく形態で、災害リスクのある場所への人間生活の暴露であると言えようかと思えます。

まとめると、土砂災害は、豪雨だけでないし、また、地形だけでなく、危険な場所に生活するという、人間の生活にも注目する必要があると言えます。これらを踏まえると、防災教育はどういうものを使って学ばいいかということが考えやすくなります。

まず欠かせないのが、先ほどセンター長もおっしゃっておられたハザードマップだろうと思います。自分の近くの危険な場所はどこなのか。暮らしを位置づけるということができようかと思えます。概要を知るためには国土交通省の「重ねるハザードマップ」というのが結構便利だなと思っています。

■ハザードマップポータルサイト <https://disaportal.gsi.go.jp/>

サイトを拡大していったら、さらに「洪水」というボタンを押せば、このように、広島県の場合には河口部とか内陸の盆地で氾濫が起これそうだとということが分かります。

さらに、「土砂災害」というボタンをクリックしますと、広島県はほとんど、あるいは、かなりの範囲がハザードのある場所として塗られてしまいます。大変な状況になりますが、山地の斜面がたくさんあること、また、そこに実は結構たくさんの方が住んでいるということが分かります。土砂災害警戒区域というのは家屋が一定数ないと指定されません。は崩壊が起これそうな場所というのはハザードマップの示された場所以外にもまだまだたくさんあるんですが、人が住んでないので指定されてないところもあるということになります。

少し拡大をして、広島大学のある東広島市に注目してみましよう。土砂災害については盆地の周辺の山の山麓に区域が設定されています。

洪水は盆地の北部で、市街地の近くに指定がなされています。これに、地形などを入れてみると、生活の舞台がどんなふうになっているかというのがよく分かると思うんですね。この中で洪水に注目すると、河川が、西条中央あたりの丘陵部を抜けて迂回をするような形になっていますので、この付近は河川が停滞をし、スムーズに流れにくい場所になってしまいます。すなわち、増水が起これということが予想されています。狭窄部で河川が増水して氾濫するというふうなものにちょっと似ていて、2018年の真備町の様子とやや近いかなとも思います。

一方で、暴露のほうは、地表の様子を記した歴史的な地図で学ぶことができます。日本は100年以上の地図作りの歴史があります。こんなふうに地図が揃っている国はなかなかないので、先人の

努力に感謝しながら利用していただければと思います。国土地理院に行きますとコピーしてもらえますが、主な場所は、「今昔マップ」という地理研究者が作っているサイトで閲覧ができますので、御覧いただければと思います。

明治期のものを見ますと、西条盆地では今の酒蔵通りあたりが宿場町の名残として集落が発達していると言えます。それ以外は大体水田になっています。

■今昔マップ <https://ktgis.net/kjmapw/>

その後、大正期に入りますと、市街地が南や東に延びていき、農村部でも学校が設立されていくというのが見えてきます。

戦後間もない頃でも、大正期と大きく変わっていません。

高度経済成長期へ入るといよいよ開発が大きく始まり、市街地の南や西に延伸するという様子が見えます。また、山麓でも開発が、限定的ですが、少しずつ進みつつあるというのが見えます。

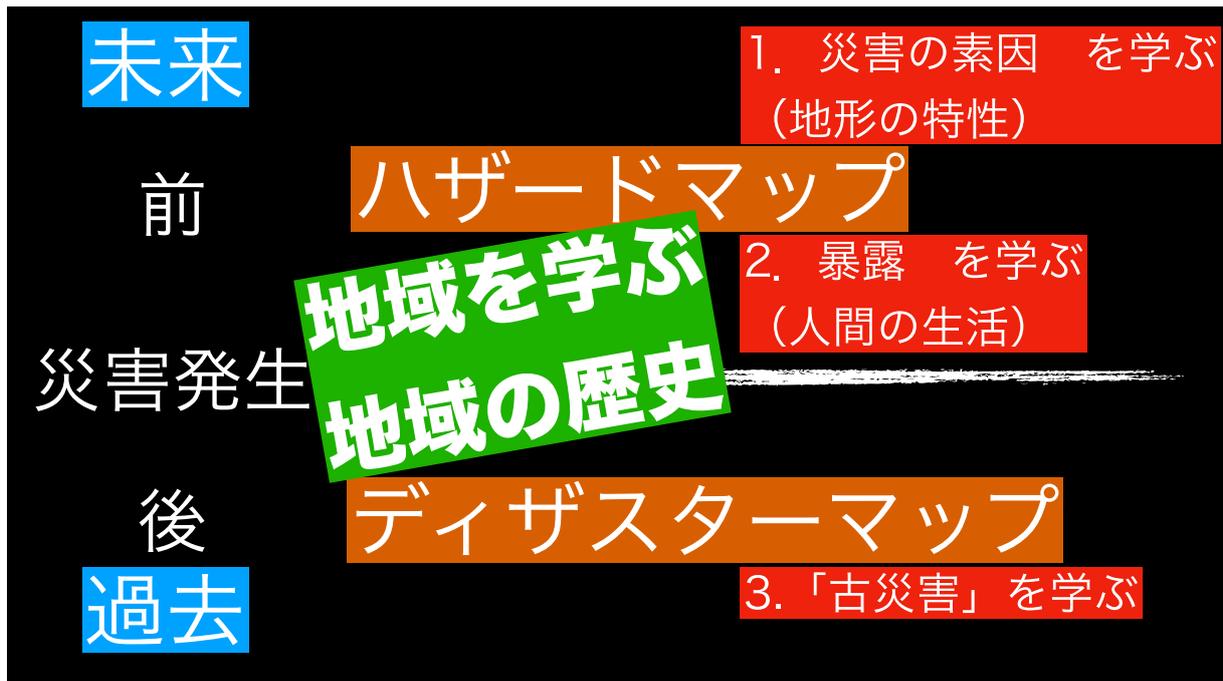
80年代に入ると、開発はいよいよ本格化してきまして、盆地の低平な場所や山麓の宅地化が進みます。丘陵の頂部あたりはそれほど心配ありませんが、そうでない場所もあるなということが見受けられます。

とはいえ、90年代になっても、東広島では、広島ほど開発が進まず、遅く始まった分、広くも進んでないといえると思います。今でも宅地化、都市化がどんどん進んでいる、日本でかなり珍しい町ですが、まだ平地に余裕があるようで、山麓への開発は少ないと思います。一方で、年々、洪水の危険性がありそうな場所には宅地化が進んでいるように見えます。

こういう地図は記号化されているので分かりにくいという方も少なくなくて、写真で見ることでもう少しリアルに想像できるかなと思います。戦後間もない頃からアメリカ軍が撮影を開始し、その後、国土地理院が定期的に写真を撮っています。

これを見ることで地域の様子をより簡便に理解できるかなと思います。山を削り、そして団地を造るというふうな様子も、この写真では土色で何となく見えるような気もするわけです。こういうものを見ていくと、地域の歴史も分かりますし、地域の人たちとコミュニケーションの素材ともなると思うんですね。御利用いただければと思います。

ハザードマップや古い地図、それから、写真を通して、地域の地形的な特徴や起こりやすさ、人間生活の歴史をひもとくことができます。学校で学ぶ日本の歴史といったようなものではなくて、地域の歴史を読み取るということが防災教育につながるのではないかと思うわけです。



発表資料（後藤） P34

ここまで、ハザードマップをベースにしなが、災害の素因を学び、暴露を学び、また、将来発生し得る災害を利用しようとしてきたわけですが、これにプラスして、災害が発生した後のことを学ぶということも防災教育を深められる鍵ではないかなと思います。その際に、地図化したものを用いるといいかなと思います。私、地理を研究している者ですから余計にそう思うわけです。そのような地図を私は勝手に「ディザスターマップ」と最近称しています。過去の災害を記録した地図を見たり、あるいは自分たちで作ったりして、どこで何が起こったのかということを知りたいと考えています。あるいは自分たちで過去の災害の歴史を掘り起こす。こんな作業をしてみたいかどうかと思うわけです。

要するに、地域を学ぶということになるわけですが、具体的に幾つか例を提示したいと思います。2018年に起こった土砂が移動した様子については、我々のグループで地図を作っていました。もう痕跡が地表からほとんど消えています。この地図を見れば、どこで崩れたのかということが恒久的に理解いただけると思います。

また、デジタルカメラの普及によって写真でたくさん取られるようになりました。リアルに理解する、非常に重要なものですが、地名があっても、なかなかどこか分からないというものが多くあります。それでは利用価値がそれほど上がらないと思います。それを地図の中に埋め込んでいくというふうな作業もしてきました。

甚大化した災害が多発しており、こういう写真というのはよく見ると思います。でも、自分の生

活圏でも起こり得ること、起こったということが理解できる非常に貴重な情報だろうと思います。見慣れた風景が、非日常的にこんな感じになるんだというのは理解を助けると思います。

小学校区ごとに紙地図のようなものも作成してきました。3年前に限らず、古い写真を寄せ集めて、皆で地図を作っていくというのは、歴史のパズルのピースをはめていくような感じで、学びとしても面白いと思います。また、広島県の防災ウェブでは全県的にそういった情報を収集しています。広島大学もその橋渡しの役割ができないかなとも思っています。

■平成 30 年豪雨の被災写真と撮影位置を示した地図 <https://www.hiroshima-u.ac.jp/hrrc/news/57222>

防災教育は、えてして、怖い、ああいう写真を見るようなものになりがちですけれども、楽しくやらないと学びは能率が上がりませんので、我々のところでは、のん太くんという東広島市のゆるキャラを使いながら防災の取組などを紹介し、過去の石碑などを見て歩くというふうなビデオを作ってみました。

■のん太と学ぶ身近な災害 <https://www.hiroshima-u.ac.jp/hrrc/news/60939>

動画を視聴するだけでなく、それをヒントに自分でできることを考えてみようということを促すような授業案の提案などもしています。子供たちが考えるということを促したいと思ったわけです。

さっきのビデオにも登場しましたけれども、「自然災害伝承碑」というのが最近、国土地理院では地図記号になりました。石碑の記号の中に1本棒が入っただけなんですけれども、非常に大きな1本だろうと我々は捉えています。

この地図記号の制定に非常に大きな役割を果たしたのはうちのセンターの熊原先生なんですけれども、先週、彼は福山の小学校で校内にある自然災害伝承碑を使って子供たちと一緒に学ぶという授業をしてきています。碑の意味を、地域の地形の様子や地理的な配置の様子など、現地見学を通して理解させる内容でした。子供の「自分の身近な地域でこんなことが起こったということを知らなかった」という感想を見る限り、地域を再発見してもらった、非常にいい学びだったのではないかなと思います。

私もちょっとだけ楽しんだ例を紹介します。2018年に災害があった後、神社に行くと、ほとんど被災をしてないんですね。そのような神社はどれくらいあるんだろうというので、分布図を作って比較をしてみました。警戒区域に入っている神社の数というのは少なくないんですが、実際に被災を受けたというのは本当にごくわずかで、中には、被災を受けて移転したというふうな記述がある神社も中にはありました。警戒区域のなかでも、ちょっと小高いところで、災害から守られるようないい場所にあるんだなということで、楽しく学ばせてもらいました。

災害伝承は難しい

- ・生活者として学び
- ・生き延びる→

災害は繰り返す でも・・・

同じ場所ではめったに起こらない。世代を跨ぐ。

だから・・・活動が必要（防災教育）

資料は何かよい？ 写真，ビデオ，体験記，石碑，地図
場所は？ 身近な地域がベストか？

ただ・・・ヒントはあるが答えはない

「自分が、今 この場所で 生きている感覚」を

発表資料（後藤） P44

土地との関係が非常に乏しい現代社会では、多発する災害の中を生き抜くために、傍観者や消費者にならずに、主体的に学ぶ、生きる生活者として学んでいくこと、これが防災教育の1つの下地のようなものかなと思っています。生き延びるための教育と言われますが、生きていることを自覚するという、当たり前のことを認識する教育であるような気もしています。

以上で終わらせていただきます。

★清田（東広島市教育委員会指導課指導主事）

それでは、後藤先生のお話を受けまして、このセッション1の「災害の記憶と記録を探しだし継承する防災教育」というテーマにさらに迫っていけるように、少し学校教育の切り口から話題提供のほうをさせていただければと思います。

後藤先生のお話の中で、災害について継承する防災教育が災害対策の要の1つという御提言がありました。こうした災害対策の要となるようにということで、防災教育を考えていくために、まず学校における防災教育の現状について触れていきたいと思います。

学校における防災教育ですが、下のほうにある学校安全の3領域の1つに位置づけられております。また、学校では、危機管理に対応するというので、未然防止や、発生時の行動、発生後の収まった時の心のケア、今後の授業にどうつなげていくかといった、事前、発生時、事後の危機管理に対応した教育を進めてきているところです。

特に、子供たちが自分たちの安全を確保できるように、また、自分たちにも何か起こったときに、まずは命を大事にし、自ら安全に行動ができるようにということで、子供たちに対する、こうした安全に関する取組が計画的に進めていけるようにということで、学校では学校安全計画という

ものを立てているのですが、主に、子供たちに対する教科の学習を中心とした安全教育と、それから、日常の避難経路を確認したりとか、もし地震が起こったり災害が発生したときにどう対処していくかといったような危機管理マニュアルのような、安全管理の両面から取組を進めております。場合によっては、学校にとどまらず、地域、それから家庭とも連携しながら、子供たちの安全に関わる指導というところを組織的に行っていると言えます。

これは、ある学校の対応マニュアルですが、職員は役割分担や責任を明確にして、組織で対応できるようにということで、日頃から備えはしっかりしていこうという動きをしているところです。

また、教育に目を向けていきますと、このように幼稚園の段階から高等学校終了段階まで、それぞれ災害に適切に対応する能力を培っていこうということで目標を設定して、様々な教育活動に取り組んでおります。

児童生徒に育成すべき資質・能力の整理表

幼稚園	危険な場所や事物が分かり、落ち着いて指示を受けて素早く行動できる。
小学校 (低学年)	近くの大人の指示に従うなど適切な行動ができる。
小学校 (中学年)	災害の時に起こる様々な危険について知り、自ら安全な行動ができる。
小学校 (高学年)	日常生活の様々な場面で発生する災害の危険を理解し、安全な行動ができるとともに、自分の安全だけでなく、他の人々の安全にも気配りができる。
中学校	地域の過去の災害や他の地域の災害例から危険を理解し、災害への日常の備えや的確な避難行動ができる。また、ボランティア活動の大切さについて理解を深める。

8

発表資料（清田） P8

私は主に小学校に長くいましたので、小学校の子供たちに育成すべき資質・能力を整理して表に表したものを掲載していますが、まず、低学年では、大人の指示に従って適切な行動ができるようにすること、小学校を卒業するときには、少し社会に目を向けて、日常生活の中で様々な場面で発生する災害の危険性ということを理解して、安全な行動ができるように、また、自分の安全だけでなく、他の人の安全にも気配りができるように、こうした力が付いていくようにということで、様々な教育場面で子供たちの資質・能力を育んでいます。

特に中核となる教科，例えば社会であるとか理科であるとか，また，体育，保健体育，こういった教科間の連携を図りながら，子供たちには教科横断的な視点から学校での教育課程を編成しております。

その代表的なものとして，これは5年生の理科の教科書の一部を抜粋したものです。災害に関する基礎的な理解ということで，「わたしたちのくらしと災害」として，川の水の働きから，大雨で川が増水した際に起こる災害から命を守るためにはどうしたらいいかといった学習内容が理科の教科書の中にも位置づけられています。この学習を行う際に，先ほど後藤先生からも御紹介がありましたハザードマップなども市内の小学校では活用して，自分の校区の状況を知るような学習活動も行っています。

また，市内の小・中学校での取組の現状として，西日本豪雨災害の経験を生かす取組も行われております。

この計画書は，図書館で防災&職員のイベントを行おうということで先生方から声が出されたという，計画の資料です。

教員自身が防災の取組の必要性というところを認識して，何とか子供たちに身近な場面から防災について考える取組を工夫していこうと，図書館に防災食を展示したり，また，防災グッズを体験できるようなコーナーをつくったり，栄養教諭さんが防災食を実際に調理して子供たちが試食するといった取組がありました。



発表資料（清田） P14

また，養護教諭さんが保健体育の授業内容と関連させて，地震が起こった際の二次被害を防いでいくために，足元を守る段ボールを使ったスリッパ作りから，災害が起こったときにできそうなこ

とは何か、考える機会を設けておられる実践があります。



発表資料（清田） P15

さらに、広島大学との連携の大きな柱に、先ほど後藤先生から御紹介のありました防災教育のビデオ、これの開発のほうにも一緒に携わらせていただいております。また、学校においては、防災センターのほうでつくられた避難体験VRゴーグルを実際に着用して体験するといった取組を中学校のほうでも行っております。

このように、市内の小・中学校での取組の状況を見たところ、災害が起こったときにどう対処していくか、といった教育活動に取り入れる動きは広がっているように思います。先生方の豪雨災害での経験が1つの要因、きっかけとなって、身近に起こった災害の経験を基に何とか子供たちと一緒に考えていこう、こういった取組は広がってきております。

また、コロナ禍における取組についてですが、先日、9月に、広島大学の教育ビジョン研究センターと東広島市教育委員会が連携をして、市内複数の小学校をオンラインで結んだ広域交流型のオンライン社会科地域学習を実施しました。

これは概要図ですが、実際になかなか子供たちは現場に行けない。そこで被災した地域の上空からドローンを飛ばして、その地域の実態を知る。また、広島大学の先生がコーディネーターとなって、複数の学校を結んで、子供たちと一緒に災害について知ろうということで、市内の小学校8校、13学級384名が参加して、こういった防災に関わるオンラインの地域学習という実践も行われました。

学習の中で、子供たちの問いを解決する学習の流れになっていて、子供たちが身近に感じていることをまず出発点に、自分たちがどうやって危険から身を守っていくかといった学習の展開となっておりました。

先ほども御紹介しましたが、現地からの中継や動画の視聴など、身近に感じる工夫が様々にありました。

このように、教師からの発問に、うーんと頭を抱えて悩む児童の姿も見られて、子供たちにとっては、災害が起こったことを身近に感じ、自分事として考えるきっかけになる、そういった授業になっている様子を感じられました。

先生方のほうからも、「子供たちの疑問に答えるような形で授業が進んだ」「問いを持ちながら考える子供たちの姿が印象的だった」と、そういった声もありました。

こういった取組というのは、自らの安全を確保し、命を守る行動ができるように主体的に考えて行動ができる子供たちの資質・能力を伸ばしていくためには、とても大事な取組、教育の内容だと感じております。

今後の取組について

全ての子供たちが、自らの安全を確保し、命を守る行動ができるよう、主体的に考え、行動ができる資質・能力を育てていきたい。

→的確な思考・判断に基づく意志決定や行動選択ができるようにするための教材開発。

→より実効性のある取組にしていくための地域の実情に応じた教育プログラムの開発。

26

発表資料（清田） P26

こうした取組をさらに広げていくためには、先ほど後藤先生が言ってくださったような、防災教育と楽しい地域学習をどうやってコラボさせていくか。ここまでいろいろ、後藤先生をはじめ、最初のテーマからのお話をお伺いして、やはり、子供たちにとって自分事として主体を持って考えていけるような防災教育にするために、一つICTの有効活用はあるのではないかと。こういった現状だけではなくて、災害の記録、過去を知り、そして、未来へどう自分が行動していくか、今の自分の生活にどうやって生かしていくか。先ほど紹介のあったような「今昔マップ」なども有効活用できるなど。こうした情報ツールをいかに開発していくか、このあたりが防災教育を充実させて

いくためにはキーになるのではないかなということを感じております。

しかし一方で、学校にとって大がかりの授業準備というのは難しいところもあります。大学との連携によって私たちは知らないことを知る機会にもなっていくので、さらに継続的にこうした取組を進めていくためには、やはりこういう連携事業、連携の取組から、子供たちにとって生きた学習材を提供して、子供たちの心を動かし、主体的に行動できる資質、能力を育てていく、こういった取組をもっと広げていきたいなと感じているところです。

今日、ここに御参会の皆様かの中には様々な分野の方がいらっしゃるというお話を後藤先生からお伺いいたしました。私は学校教育の切り口から、この災害の記憶と記録をどう継承していくかという視点で、自分が感じていることをお話しさせていただいたのですが、さらにこの取組が広がっていくように、フロアの方からもいろんな御示唆をいただけたらということを感じております。

私からは以上です。

★後藤（人間社会科学研究科准教授）

はい、ありがとうございました。情報化が進み、端末が配られるなど、いろんな要素がある中で非常に興味深い教育活動も進められているということがよく分かったかと思います。

私の発表を含めまして何か御質問等ありましたら、まずお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。Z o o mで参加の方は、チャットでいただいても結構ですけれども。

★質問者：参加者

詳細な御説明、どうもありがとうございました。

学校教育の重要性というのは非常に大きいと思っているんですが、子供たちが生きる力という、先ほど説明した資料ができて、もう随分年数がたっているわけですね。学校教育を受けてきた人たちが社会に出ると、全くそういうものに反応しないかのような行動をとるというので、例えば、これは教材の問題ではなくて、教える先生、あるいは教え方というところに問題があるのか。まだ教えるべきことがきちんと教育できていないと捉えるべきなのか。この辺の、教育の現場として、今のような、方向性は間違っていないような気はするんですが、余りにも行政に頼り過ぎているような教育にもなりかねないものですから、実践を重んずるという点で臨場感のあるようなということが必要なのだろうなと思うんですが、学校教育として何がまだ欠けておられるのか、教えていただければと思います。

★清田（東広島市教育委員会指導課指導主事）

学校現場に求められる1つ、教師の背中を見て学ぶではないですけど、先生、一人一人の捉え方というのは、子供たちへの教育にとって大変重要であると考えております。まずは、後藤先生の説明の中に「楽しい」というキーワードが出ていましたが、教師自身が地域を知り、地域から学ぶことの楽しさを実感できれば、言葉にも重みが出て、子供たちの心を揺り動かすようなそういった話

題提供も可能になってくるのではないかと考えています。まずは先生方が楽しいと思えるような、地域から素材を学ぶような場、今日のような学びの場をつくっていったらよいなということを今、考えております。教師自身が、大事なんだよということをしっかりと伝えられるような、腑に落ちるようなものを持っているということが大事なので、そういった学習の機会を何とか提供していきたいと思っています。よろしいでしょうか。

★後藤（人間社会科学研究科准教授）

重要な御指摘をいただきまして、それに対して学校の先生も勉強したいと。時間とか機会とかが欲しいなということかと思えます。大学としても、センターとしても、何かできることがないかなと、今、いろいろ考えながら聞いておりました。ありがとうございました。

そのほか、もう一件ぐらいどうでしょうか。何かございますでしょうか。特になければ、こんなことなら教育でお手伝いできますよ、という方がもしいらっしゃったら、メールでも何でも結構です。我々のほうにお伝えいただければ。上手に橋渡しをしながら、生活の主体として、それぞれの人がそれぞれの場所で生活しているということを感じながら、身を守る避難行動につながるような人間形成、そして生活が進められればなと思っています。

我々がほとんどしゃべり過ぎました。皆さんに発言いただくことができなかつたのですが、上手に、次の避難につなげるという話になっていったかなと思いますので、テーマを交代したいと思います。ありがとうございました。

(注) 自然災害のリスクは、ハザード (Hazard)、暴露 (Exposure)、脆弱性 (Vulnerability) の3要素が相互に作用することで決まるとされる (内閣府, 2015「防災白書」)。暴露とは、ハザード (斜面崩壊や洪水, 地震など) にさらされる人々や建物などを言う。

